

留用

だが、^{何事か}何事か？ と、私は及同^{うさ}。ある場

合、さうでなかつたこともあるのかだ。

この話は、いつのことだつたか、はつきり

表

しよ。私の若い時へ聞いた話のである。話

しよのは老人だつた。それだけ、ひどくち

ぢはく話である。だが、ちぢはくは私の^{聞いた}話

で、老人の罪ではな

それはサツフオークの海岸近くで起つた話

だ。道^{みやま}の起伏が^{みやま}とくろで、北^へ

向^{むか}て行くと、^{みやま}高みの頂上へ、道の左側へ

一軒の家がたつていゝ。

（高きだけの幅もない、ふちろりとした）

家ど、たぶん一七七〇年頃のむき木ものかし

い。前方のてつぺんには、低い三角の破風が

ついでかり

ついでかり、そのまんまの丸窓がっついていゝ。家

のうしろには厩や物置があり、まんなかのし

（米園）

（骨張った）

ろには、この家らしい庭がある。

左の楹の樹が、あちりり、*（すいり）* まは、*（ま）*

（ま） 針えにしがで敷かれた土地が、ひろがっ

ていゝ。戸口の前の柱は、看板がの

（か）

（ま）、あかし、評判の宿屋なら

たといつても、そんな長い間がたつたとは思
われまい。

この宿屋 ~~の~~ この話をしてくれなトムソ

ン ~~氏~~ の、 ~~ゆきまの~~ まい若のつた ~~成~~ ^成

ふ暮晴れた春の日、ケンブリッジ大学から

旅 ~~し~~ ^行 来たのであ。独りで泊ることも

つて、読書時間を得たのであ。

宿屋の亭主も妻も、まめまめしく、よく客

をもてなすのであ。その ~~宿~~ ^宿 は一人の

泊り客もなつた。トムソンは、道も果

色も見晴らす——もしその部屋が、東向き

だつたら、どうもそんなわけにはいかぬわつ

たりのため——二階の大きな部屋を壊さなければ

家は住りやすく、暖かだつた。

トムソン氏は、毎日を、静かに無事です

どした。午前中は勉強し、午後は、書あたり

をひとまわす、夜は、田舎の連中や宿の人

たすと、しばらく話をし、
（書きかきかた）

水を割ったブランデーといふ、その頃旅行の

*飲*みもののみ、
（ちやうど） 読書や書きものころ、
（と） 床の

行くのだら。で、トムソン氏は、それが

一箇月中思ふあまり續いたら、満足がらは

ずである。仕事ははめどらし、その年の四

月は、すばらしい天気だら ~~ん~~ — ^{この天気} 表は信

用していい理由がある。オルランド・ホイッス

ルクラフト ^の ~~表~~ ^{天気} ~~表~~ ^表 は、その年 ^の ~~表~~ ^表 心算しき

年々として、記入していらあひである。

トムソン氏の観察する道の一つは、北に

通ずる道 ~~の~~ ^表 ~~表~~ ^表 で、高く、^{ヒース} 沼地と呼ばれたひ

ろい公有地を穿つ切つていら。トムソン氏は、

ある輝やかな午後、はじめぐるぐる方向は足を

道のたすき

向けたのであつた、ふと、五六百ヤード

^{ひんた} ~~あるまじき~~ ~~もの~~ ~~を~~ ~~見~~ ~~た~~、まじか白い物体を見か

けた。きんだろくか知りないと思つた。すぐ

そはへ逃かすくと、それは ^{ピラ} ^{ピラ} 角柱の土基がしく

かえだの

とあつた、まじか四角な白い石の一塊で、上方に

とまじか四角な穴があいていた。ちよくと今日

でも、セツトフオード沼地で、見ゆけるよう

な石である。 ^{あつた} それを調べたあと、トムソン

^は ニ三分、あちりの景色を眺めた。一つ一つ

五つ六つの子屋根のユツ
テージヤ

教室の塔が見え、
太陽の光線は、
キラキラと善屋根の
ピカピカ

する窓も見え、
まさ、
かりかりたる海のひろ

わりと見えな。――で、
トムソン君は、
足

を直めん。

その晩、
宿の機織りの
音もきこえぬ
九時

トムソン君は、
どろどろと
あの白ら石が、
かまいたて

あの今有地があるのか、
きいてみる。

古風なしろくでね。
あれがあるといふ

あれは時代によ、
おもしろきは
まだ
かんたんに
生かす

あつたんですよ。と、
ベツツといふ宿の亭

まゝの^{ミナ}つな。 曰げんとし、さうですよ。と、

^{とこから}いっつな。 曰ちうつと小高いところにある

るが、あのよりは^{シイ・パーク}航海標が、たててあつた

のかし^{いのし}知れまうせんよと、トム^{トム}さん

と、^{キツト}■ベツツはうをわいて、曰ああ。

ですよ。^{シイ・パーク}航海標の船の見えるとは、

南^{ミナ}ん^{ミナ}の^{ミナ}ありまのりぬ。 たの、どんと

とつたつと、あすらんありやあ、^{ミナ}はる^{ミナ}の^{ミナ}、

朽ちつちまいまさよ。と、^{ミナ}いっつな。

と、まじけりの男が口を出して、曰朽ちてよ

海軍大臣の事務所

かつたよ。ありやあ、^{カレシ}縁妻のいい目標ではな

いつく、^{いつく}年寄り達が言つていらよ。縁妻のよ

くす、^{海軍}いつてのは、~~海軍~~海軍にのけていふこと

をんでさぬぬ。口口と、縁妻の思いつて

さ？と、トソソソ、おきくと、僕は答え

て、口ええ、^たわし^{たつて}財を、その目標を見た

ことはない^んだ、年寄り達は、^たわし^たおいつ

たよ、^たわし^たを考へて持つていまふよ。こと

ら、年ごとつた奴等けぬ。で、^んわし^んは、あ

れをたんきつおふんのは、^に奴等^の財を考へて

つて、思ふんでさあ。止

これ以上 ^{めいじ} ~~書きあはさるゝ~~ 話の種は、得られ

ることもなかつた。この連中はあまり口軽で

ないので、黙りこんだ。そ ^{これから} ~~書きあはさるゝ~~、話の

材の財政や収穫について話し出した。ベツツ
が音頭取りだつた。

トムソンが、健康上、田舎道を散歩 ^{した} の

は、毎日ではなかつた。あゝ ~~曇~~ 晴れた日

の午後三時、彼は忙しく書きものをしつゝいた。

か、やめて彼は伸びをしく立ちあがり、新屋

おし廊下へ出た。向うは書斎一つ部屋があり、

そのまきり階段の上り口、まじりそのまきり

カミヤ都屋のまきり
一つは裏書へのまき出し、

一つは南へのまき出し、二つの部屋があつた。



廊下の南の端には、窓ぬあつた。そこへ彼は、

こんないい午後を無駄にすゝんで、不都合

だと考へをうめ、あゝいて行つた。だが、

ちやうどその時は、仕事の日取好調なつた時で、

彼は五分だけ気をぬいて、部屋へ帰らうと

思つた。そゝゝこの五分を  ベツツ 

夫の弟は

ベツとカヤシ
~~...~~ 今までのぞいなこと

さい、廊下の部屋々々を見ることがあるよ

と思つた。家は誰もいないらしかつた。そ

の日は市日マシヒだつたので、酒場の女中でも残つ

ていへば、みんな町へ出かけた

しのかつた。家はけんとにシーンとしていた。

さしうち日まは実り暑かつた。蠅の子が心確

ちの中で、ブンブン唸つていた。そこでトム

ソンは探險のとりかかつた。と正面の部屋は、

壁エドマント
〔東アングリア王。八七〇年アーン人に捕われ、
基督教徒の信仰を棄ててわしの斬首す。〕

片画がある ^{（まはす）} ほかは、かわつたこともそのつ

た。廊下の、^{（一方に）} 後多御衣あつて隣つていゝ二つ

の部屋は、美しくきれいだった。後の部屋は

は窓の二つ ^{（あ）} だった、^{（ここ）} 義はどつちも一

つだった。その部屋と反対側の、のぞりの西

南の部屋へ、^{（あ）} 鍵は入つて行 ^{（あ）} った。この部屋は、

^{（鍵）} 鍵がかろさぬていたのだ、トムソンは、

まうたく、むやみやほ好奇心で駆られて、こん

な ^{（せりり込め）} ちあけなく ^{（あ）} 夜まき ^{（あ）} を ^{（あ）} 取 ^{（あ）} り ^{（あ）} 場所、まんの

あふよい秘密すべかあるもんかと確信して、

浮青い様子縹のおおりの
いかつん

自分の部屋に鍵をとりに行つた。そしてそれ

が手ごたえをみつけた時、まづ三つほどの部

屋の鍵を^とつて来た。その一つはうまく合つ

た。まづその鍵を^とり、^{三つの}戸を開けた。

部屋には、西と南との^{三つの}壁が^{三つの}あつた。それ

で^{まが}壁は一板いあつた。日光は實に暑かつ

た。どこにも敷物一つなく、ただおき出しの

床板。窓一枚もなく、手ばい壁もない。ただ、

おつとむところの隅に、^{三つの}ベッドが一つある

だけ。そのベッドは鉄製で、^{三つの}蒲団と枕が置か

みれていた。

御想像の通り、ちんの入ってつてもよい部屋

しかし、さくら、トムソン 大急

ただ、それの踏ちついて外へ出 まじしき

しりとりPを閉めさせ、廊下の窓へよつか

かり、實際全身をかえが 雲々

いかがあつた。それは、おかいの下はなにか

ね おかい のたつた。いや、 おかれ いたるばかり

とよい。動いているのたつた。それはたれか

で、 たれか なにかおはなかつた。というのは、

着
のかたちだが、まちぬいなる秋 このつらつと



た。しかもその首は、すつかりぬわけて

いた。ぬわられた首でぬいているをえく、死骸の

ほみんあるしうで 骨。しかもこれは死 骸

では 骨 なるつん。たしかに死骸ではなるつん。

だつてそれは、 ムクムク もちあがつて、ブルブル震え

こつたではなにか。

もしトムソンが、これを落しおりの、 チラチラする

の 光 を 見 た か つ た ら、 女 彼はホツと 大

想だ た か つ た ら う。 た か つ た ら う 日 中

ん、そんなことの言え^た義理ではない。どう

した^ら? ^かは^いず^りも^あら^ず、ドア^の鍵^をあ^らせ^て

けた。おつかひをひつくりで、ドア^の身^を寄^せて、

かみ込み、息をのんで耳をすました。たぶ

んぞこれは、さう苦しい呼吸のひびき、そし

て平凡な^{多音義}響^のあ^らり^得大^はひ^り、あたりは、

まうたくしーんとしーいた。だが、まず^解結^釋は、

幾分おぼろしく手で、ドアの穴^の鍵^をさ^し込

んだ。そ^のか^ら捻^つた。か^らか^らが^ちが^りと

鳴^った。——その途端、よろめくように^踏ん^だ

づける足音が、ドアのほうへやつて来るのか
聞えた。

トムソンは、まるで鬼のようになり、自分の部屋
へ逃げ、^{（泣）} ドア ~~を~~ ^{に鍵を掛け} ~~閉~~ ざった。だが、そ

れはたしかに無駄だとわかった。ドアとか鍵

とかいつたものの、彼の思ったより ~~早く~~ ^{早く} 障子

物であるにしろか？ だが、それは、その瞬間

間、彼の考えることのできたすべてだった。

そして実際、あれごとく起らなかった。だが、

そこには、どうもなんらいいのという、みじめな

疑懼を伴う、するといふ懸念の時のあるだけだ

つた。この衝動は、~~書~~言うまでもなく、こん

を恐ろしい同居人とのいゝる家々への、で

きただけ早く御免蒙りたいといふことだつた。

だが、ついこの前日、彼は、すくなくももろ

一周向帯をしようと言つたのだつた。それで

~~髪を~~ ^{たとえ} 彼の計画を妻えたと ^{つた} いう

も、たしかに、用もない部屋を覗き見した

といふ疑いも、^{どうして} ~~驚~~ ^{まぬかれ} ることおびきよ

か？、その上、ベツツ ^{夫婦} 家々が、あの同居 ~~家~~

人ト——まが家を退散しないう同居人しんつ

いて、なれものも知つてゐるか、^の或はまるで

知らなう——それは、つまりなれも恐るべき

しのはなうといふのと同じ意味を知——のか、

或はまう、部屋を閉鎖するまことは、十分承

知してゐるから、それ——とも心配の種とい

ふまではなうなうのか、いそれいふても、

それはさほど恐るるにあらぬように思われ^た。

^{ソウ}其處でまがを退散しなう、そこまでのと

ころ^{たんに}まがを退散しなう、まがも嫌な退散をし

たわけではなかつたのである。大體トといつて、さし障りのない限り、滞在すべきであつた。

で、トムソンは、その園中滞在した。ど
うしてもあのドアのことか、忘れられちまつ

た。寝る時は、~~寝る~~ためかいはしんが、晝

でも夜でも、静かな時の廊下^{ひび}を歩はたて、
_{シツと}

^{あつた音}ある音は、すくしも同きのかす

まゝとらん。讀者は、トムソンが、この宿屋

に關係した話を、たぶんベツツツ~~の~~では駈

手紙

へき方法、^{（要）}最も目立たない方法を、考へ出さ

くと頭張つた。さうして遂に、こんな

（田中）
たぐひみと

は、

午後四時頃の汽車で、ここを出發

することにし、^{（要）}後荷物

貸馬車が

物を積みながら待つてゐる間、二階で最後

の挨拶をしようといふのである。自分の部屋

を見まわし、まゐりかまひ荷造りされたもの

（要）

が、^{（要）}しまゝと調へると、さうして、油

を塗つた錠（効果上）をもつて、あのド

アを、もう一度、サツと開けをサツと
こやろ〜といふのたつた。
南に

竹筋通り、やりあつた。勘定は拂われ、

貸出車~~の~~荷物を移すにやめる間、ふいでの、

ちやうと〜話の進んだ。口々の地方は樂し

い——堂の愉快で〜。御亭主さん、お内儀^{おんぎ}

さん、ありがと。いつかまたやつて来たい

です。と、一方^かは、
書^か一方^かは、口お

氣に及〜嬉〜いです。わたし達も、できる

だけのことはい〜んつもりです。いつまでもか

言葉は忘れません。

（~~あ~~）お天気がつづきで結構
ほかに

でいふ。と云う。それから、口ははちやうと

二階を見てまますよ。本をえんか、話しか

も知りませんのらぬ。いや、侍心配りなふ

ません。すぐ戻つて来ますのら。と——そして、

できるだけ静めん、トムソンは、例のドブ

君の寄り、それを見つけた。勿論

幻滅！ 彼はすつかり聲高のんがら出した。

つづき ~~あ~~ いや坐 ~~あ~~ といつてもしいお、と

口の端りは、かんと、~~あ~~ 案山子が置いてある

だけのくたつた!

無論、菜園あり、この無人の部屋に抜けこ

まれ天窓山子……さうだ。だが、こゝで、か

みしきは止んだ。窓山子の、はだしの骨格つ

た足を持つか? 窓山子の首の、肩（肩のまわらん）を

ラリと垂れるか? 窓山子は鉄の轡輪、鎖の

つなぎ目さか? 窓山子（持）は起きあがり、

動き、（動）腰（腰）揺ゆ、首（首）垂や、両脇に手を

つけて、床（床）を横切らうか? できるか? そし

て（て）……か? ……

はたこえ （はたこえ） ひびく （ひびく） 響 （響）
つたものでなうに……

ドアをバタン、階段口へまっしぐら、階

段の一足飛び、フブいて ^{失神} ~~舞~~ — トムソン

~~あざむき~~ は息を吹きかめると、ベツツバ、ブランデー

の瓶を叩いて、上からこぼれようのまっつてい

ん。ベツツの顔は、非難の色がみまがらつて

いた。口あんまりことをしてやい ^{おん} ~~おん~~ です。

ほんとくね、いぢんです。ナかなことをし

てあげようとした人間、くんなことをする

をうて、いいやり方では有りませんよ。——と

んま言葉をとムソンは聞いた。だが、どうも

と友か覚えはなかつた。~~ガ~~この宿屋の

名にのみあつたよゝまゝとは、一切口外しな

と、~~後~~詳解もしほ話しんのだね、ベツツ

も、~~さ~~と ^{いよいよ} 妻君はをいささのくと、それを受

けられま^{いよいよ}つた。だが、とくとくわあつてく

れん。^{汽車にはもう向はあわちかつた} ^{今と多分はあつた} ^{汽車はあつた} ので、トムソ

ンは ~~夏~~ 馬車で町に行き一泊する。とくにし

た。彼が出来る前、ベツツ夫妻は、けんの

わすか ~~知~~ 知つて ^{いよいよ} 語りしん。——口を

の男は、すつと以前、この主人がつたとい

うとどです。さうしてあの沼地のあたりを縄張

りわしてつた山賊達と懇意になつたのでし

た。それの身の破滅^ねをやりすした。
^{鎖ひ絞}
多岐重吉

^首 されん^首 善治のたさうですが、あつたか御

いなりなつたあの石が、絞首臺の跡かといふこ

とでを。ええ、奥師達のそれを取り除けたの

だと思ひますね。海の方から^{それ} 霧を見たとき、

逆めなると^霧 いくんどをうかぬ。ええ、わ

たし達も、この家^{はい}の^は雨^は、この家をもつ

こいた人の^達ら、おけを聞きまへんよ。"あの都

屋は~~め~~^開めて置け。だがベッドは持ち出しちや

いけやうい。そうすれば妻なるとはなない。つて

いいました。それあげようなはごとも起すな

かつたのです。一度だつてあれ^いかゝる家に現

われなことはありません。たとえ~~い~~^いあれ^いのな

れかしたところで、噂は言なさい~~い~~のでを。

ともかく、われし遠知^いころん住んでのら、あれ

を見たと^いのは、あな^い一人^いびやふ。われ

しは~~い~~^いあれ^いを見たと^いもな^いければ、見よ

うとも^いま^いせん。あつ^いところの^いな、われし^い遠

屋へ、私の案内することゝなつた。ところの、
 部屋の前ドアを開けようとすると、彼はツカ
 ツカと響く音がする。自分で、自
 しばらく入口に立ち、蠟燭をささげ、仔細
 の内部を眺めた。それから我に帰つたよう
 に言つた。可憐な女さう。大妻はかげを返
 して。でもわたしは、こゝろをいであいられ
 ないのです。妻なわけがありませんね。――
 そのわけを翌日後、私は聞いたのだつた。
 今、讀者も聞つたのだつた。